

がん性疼痛看護認定看護師の活動

森川 昭子

日本医科大学付属病院看護部がん性疼痛看護認定看護師

The Role of the Certified Nurse in Cancer Pain Management Nursing

Akiko Morikawa

Department of Nursing Service, Nippon Medical School Hospital

(日本医科大学医学会雑誌 2016; 12: 97-98)

はじめに

1999年に誕生したがん性疼痛看護認定看護師は、がん性疼痛の全人的痛みのアセスメントと症状マネジメント、薬物療法の適切な使用と管理、および効果の評価を行うことが期待されている。2016年4月現在、全国で757名が活動している。当院には3名のがん性疼痛看護認定看護師が在職しているが、全員が入院病棟に配属されている。3名のうち2名は管理職を兼務しているが、筆者は看護スタッフとして病棟業務に携わりながら、認定看護師の活動も行っている。

病棟における活動の内容と成果

認定看護師の役割は、熟練した看護技術を用いた看護実践、実践を通しての看護師への指導、看護師に対するコンサルテーションである。がん性疼痛看護認定看護師が行う看護実践内容は、全人的苦痛の視点での疼痛評価、患者のQOLを高めるための援助、がん性疼痛に用いる薬剤の使用法の理解と効果の評価、患者・家族のセルフケア能力を高め生活の質を維持・向上させるための援助である。

当院は大学病院であることから、様々な疾患を有し

ながらがん罹患している患者も多い。また、筆者が勤務する病棟には非がんの患者も入院しているため、がん患者の看護に携わった経験が少ない看護師に対しては、筆者自らがロールモデルとなって指導している。具体的には、看護師とともに患者のベッドサイドに行き、看護師が痛みのアセスメントや医療用麻薬の使用・評価方法について、基本的な知識や技術が習得できるように支援している。その結果、看護師の痛みのアセスメントに関する視点が広がり、筆者が指導した内容が、看護計画の立案・評価に活かされている。

薬剤の使用については、病棟に在籍している薬剤師を交えてカンファレンスを行い、情報が共有できるように調整している。看護師は共有した薬剤に関する知識をもとに、痛みのあるがん患者に対して、鎮痛薬の作用、副作用、使用方法について説明する。筆者は、患者が主体的に疼痛コントロールに取り組めるように、患者とともに生活上の工夫について考えている。その結果、初めて鎮痛薬が処方された時、いつ薬を服用すべきか悩んでいた患者が効果的に薬を服用できるようになり、患者の生活の質が向上している。痛みの緩和に難渋する患者に対しては、主治医、患者・家族と相談後、緩和ケアチームにコンサルトし、より専門的な疼痛管理ができるように調整している。タイムリーにコンサルトすることにより、痛みで何日間も苦

Key words: pain control, Certified Nurse in Cancer Pain Management Nursing

Correspondence to Akiko Morikawa, Department of Nursing Service, Nippon Medical School Hospital, 1-1-5 Sendagi, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8603, Japan

E-mail: akichama1011@nms.ac.jp

Journal Website (<http://www.nms.ac.jp/jmanms/>)

痛に苛まれる患者が少なくなっている。

院内における活動内容

がん対策基本計画の「がんと診断された時からの緩和ケアの推進」の中で、緩和ケアに関する看護師の研修体制の整備がある。筆者は、院内に所属するがん看護専門看護師、乳がん看護認定看護師、がん化学療法看護認定看護師、がん放射線療法看護認定看護師と連携して、系統立てた教育を企画し運営している。また、緩和ケアチームのメンバーとして、医療用麻薬を使用する患者向けパンフレットや緩和ケアマニュアルの作成、医師に対する緩和ケア研修会のファシリテーターの役割を担っている。

おわりに

筆者は9年間、がん性疼痛看護認定看護師として活動している。がん性疼痛に関連する看護ケアの質の向上をはかることを目的に、患者が痛みなく穏やかに生活できるように、その人らしく過ごすことができるように寄り添っていきたい。また、患者のQOLが維持、向上するために、自分に何ができるかを常に考え、がん性疼痛看護認定看護師としての役割を遂行していきたいと考える。

(受付：2016年2月14日)

(受理：2016年6月6日)